
神の庭

ユウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の庭

【Nコード】

N2539I

【作者名】

ユウタ

【あらすじ】

ハンターを生業にしているこの世界では獣人という種族の狸人の少年アレン……。

アレンは、子供ながらも優秀なハンターで、数々の仕事を100%の達成率でこなしていた。

が、とある高額の依頼によって、アレンは自分の過去と向き合う旅に出ることとなる。

第一話 ハンターの少年

そこはどこかの部屋の一室……。

暗い部屋の中には、簡易ベッドが二つ、部屋の隅と隅に離れるように設置してある。

その部屋にはそれしかなく、全体がコンクリート造りになっていた。

しかも、窓には鉄格子がはめられており、部屋全体が牢屋のような役割を果たしていた。

そして、部屋と外の廊下を繋ぐ扉は、分厚い鉄の扉で出来ており、外側から鍵がかけられていた。

そんな異様な部屋に、二人の子供が片方のベッドに座りこみ、声が外に漏れないように、ひそひそと話していた。

二人とも、白い大きなローブのようなものを一枚だけ羽織っており、コンクリート造りのこの部屋では、とても寒い……。

「なあ……、もしここから出られたら何がしたい？」

と、白い毛並みの猫人の少年が隣の茶色い毛並みの狸人の少年に訊いた。

「僕……海がみたいな……」

そう、答えた狸人の少年はどこか遠く見るようにそつと答えた。

「海か……。俺も見てみたいな。なあ、ここから逃げ出せたらさ……。二人で海を見に行こうぜ……」

「無理だよ。ここから逃げ出すなんて……」

「無理じゃないさ……。お前と二人なら絶対できるさ！ だからさ、約束……」

「うん。そうだね……。いつか海を……。二人で見に行けるよね……」
二人の少年は、互いの胸に手を当てた。これが、彼らの約束の契りでもあった。

「でもさ……。海を見に行く前に、何かたらふく美味しいもんでも喰い

たいよな……」

と、猫人の少年が言うと、狸人の少年がクスクスと笑い、

「僕も……」

と、答えた。

ドンドン！

突然、廊下側から分厚い鉄の扉を叩く音がして、二人は口を閉じた。

「三〇二号……。時間だ」

男の声が、廊下から聞こえてきた。

「じゃあ、行ってくる。また、あとでな……」

猫人の少年はゆっくりと立ち上がると、笑顔で狸人の少年にそう言った。

薄暗いアパートの一室。

また、いつもの夢から目を覚ました狸人の少年は、軽く舌打ちをすると額に手を当てた。

「また、いつもの夢か……」

少年には、全く覚えのない場所。そして、猫人の少年と狸人の少年。

「何なんだよ、全く……」

ふと、壁に掛けてある時計に目をやった。暗がりだが、うつすらと見える時計の針は、午前二時を少しまわったところだった。

また寝なおそうと思ったが、いやに目が冴えてしまい、少年はベッドから起き上がると部屋の電気を点けた。

そして、おもむろに寝間着を脱ぐと、箆笥の中から服を取り出してそれを着込んだ。赤いシャツに青い上着、それに黄土色のズボン。それが、少年のいつもの格好だった。

「ギルドにでも行くかな。運がよければ何か仕事にありつけるしな」
少年は、そう呟くと壁に立てかけてある緑色の鞘に収まった剣を

取ると、それを背中に背負い、右肩から左腰にかけてベルトで固定した。

そして、部屋の電気を消すと颯爽とアパートから出て行った。外に出た少年は、乾いた靴音を響かせある場所へと向かっていた。やがて、目当ての場所に着くと、一呼吸おいて建物の中に入って行った。

ハンターズギルド。

別名職業斡旋所とも言われる場所で、ここに登録しておくことで色々な仕事を紹介してもらえる。

もちろん、簡単仕事から危険な仕事まであり、その度合いによってももらえる金額も変わってくる。

ここで、日々の糧を稼ぐ者もいれば、旅の途中の資金稼ぎをする者まで、様々な人種が日々行きかっている。

「おっ！ アレンじゃないか……」

建物の中に入るなり、熊人の大男が少年に話しかけてきた。

「今日はもう寝れそうにないんでな……」

「ははははは……。またいつもの夢かい？」

「ああ……。で、この様子だと、仕事の方は……」

「全くだ。まあ、こんな時間にこんな所にいるのはわし等ぐらいだしな……」

「そうだな。ダンガス……」

二人は、お互いに目を合わすと肩を竦めた。

アレン。

この狸人の少年の名前で歳は一五歳。全身が茶色い毛で覆われて太くふさふさの尻尾が生えており、その眼の色は赤色だった。背は一六〇前後で、狸人特有のぽっちゃりした体格だが、アレンの場合も同世代の狸人の少年に比べて、遙かに引き締まっていた。脂肪よりも、筋肉の割合がその大半を占めている。そして、狸人の最大の特徴でもある大きな腹鼓も、かなり鍛えられており、硬く張りのあるものだった。

さらに、顔つきも大人っぽく、性格も大人びている。アレンは、どんな場面でも、常に大人と対等に渡りあって生きていた。

そして、ダンガスと呼ばれた熊人の大男。

焦げ茶色の毛並みに碧い眼、二メートル近くある身長。そして、鍛え抜かれた筋肉で覆われた身体だが、ぽっこりとお腹が出ており、丸い尻尾が生えている。服装は、白のタンクトップにジーンズ。歳は、三十五歳だが少し子供っぽい所がある。

「少しなら話し相手になってもいいが……」

「そりやどうも……」

と、アレンの言葉に半ば呆れ顔でダンガスが答えた。

「全く……お前さん素直じゃねえなあ……」

「そうか……」

アレンがそう言うのと、ダンガスが笑いながら、

「本当は、話し相手が欲しくてここに来たんだろ？」

と、アレンの頭を撫でながら言った。

「どっちでもいいさ……」

と、アレンは先ほどから自分の頭を撫でるダンガスの手を振り払うと、素っ気なく答えた。

「ところでアレン。最近フォルグの奴を見かけんのだが、何か知らんか？」

「さあな……。フォルグは神出鬼没なんだな。俺もここんところ会ってないんだ。何か、やばい仕事でもやってるんじゃないのか？」

「かもな。まあ、あいつの腕なら心配はしてないけどな……なんせ、一流のハンターだもん……」

「目の前にもう一人いるけどな……」

「そうだな。フォルグの次に凄いのはお前さんだしな。その歳でハンターやってて、しかも腕も立つ」

「あんたの事を言ってるんだけどな……」

「よせよ。そう呼ばれてたのは、もう昔の事だ。今はただの落ちぶれハンターさ……」

そう答えるダンガスの表情は少し寂しげだった。
そんな時だった。

ハンターズギルドの扉が勢いよく開き、スーツ姿の犬人の男が建物の中に入って来た。

「おいっ！ 受付はどこだ！」

と、犬人の男が怒鳴るようにアレンたちに言った。

アレンは、何も言わず黙って奥の受付を指差した。

「ふんっ！」

犬人の男は、イライラしながら早々と受付に向かって行った。

「ありや、仕事の依頼だな……」

と、ダンガスが受付付近を見ながら言った。

「どっちに仕事がまわっても……」

アレンが、ダンガスを見ながらそう言うと、

「恨みっこなしだな……」

と、ダンガスがにやりと笑いながら、アレンに右手の親指を突き立てて見せた。

「おい！ 仕事だぞ！」

受付から、そう声がしてアレンとダンガスは早々と受付に向かった。

そこには、先ほどのスーツ姿の犬人の男が、何やら受付カウンターの
| の中にいる眼鏡をかけた中年の狐人の男と、何やら仕事の依頼の
手続きをしていた。

「よく、わし等がいるのが分かったな……」

と、ダンガスがからかうように受付の狐人に言った。

「あんたの声はでかいから、嫌でも分かるんだよダンガス……。で、
仕事なんだが……」

「おいおい……、まさかこんな奴等にやらせるのか……」

犬人の男が、侮蔑するようにアレンとダンガスを見て言った。「

ガキとオヤジじゃねえか！ もっとマシなのはいないのか？」

「ずいぶんだな……」

アレンが、呆れた顔で言った。「まあ、こんなガキに任せられないってあんたの気持ちは分らんでもないがな……」

「お客さん……。アレンを唯の子供と思ってもらっては困ります。アレンはここでは依頼達成率一〇〇パーセントの凄腕ハンターなんですから」

受付の狐人が、眼鏡のずれを直しながらそう言つと、犬人の男はふんと鼻を鳴らした。

「で、どっちに依頼を出すんだ？」

アレンが犬人の男に訊いた。

「そんなにこのガキが凄いなら、お前に依頼してやるよ。だが、後で後悔するなよ……この仕事を引き受けたことにな」

「そりゃ、ご忠告どうも」

犬人の言葉を、アレンは軽く受け流すと早速受付カウンターに向かった。

「リーヤ。依頼料はいくら何だ？」

「一万オルクだ」

と、リーヤと呼ばれた受付の狐人がアレンにそう答えた。

「一万オルクか。随分羽振りがいいな」

「それだけやばい仕事だ。やめるなら今のうちだぞ」

「内容も聞かないうちにか？ 全く、冗談きついで……」

「だが、今回の仕事は冗談抜きでやばいぞ。今のうちに覚悟しておけよ……」

「いいからはやく仕事の話をしてくれ」

「今からその依頼者と一緒にアルパス駅まで向かってくれ。詳しい内容は、依頼者からあると思うが、どうやらモンスターの群れが駅構内を占拠してるらしい……」

「たかがモンスターぐらい警察で何とかならないもんなのか？」

「モンスターの中に、どうやらやっかいな奴がいるらしくてな。そ

いつに手こずってるみたいだぞ」

「へえ……。まあ、こんな高額の仕事は久々だしな。久し振りに遣り甲斐があるぜ……」

「気をつけるよ……。どんなに腕が立つてもお前はまだ子供だ。無理は絶対にするなよ……」

「大丈夫だ。それに、あんたが俺の心配なんてする柄か？」

「そうだな……。なら、もう何も言うまい。頑張れよアレン……」

「ああ……。それじゃ、行ってくる……」

そう言うアレンに、リーヤは一枚の紙を差し出した。それは、依頼の引受けに関する紙で、アレンは近くのペン立てからペンを取ると、その紙に自分の名前を書いた。そしてそれをリーヤに手渡すと、ペン立てにペンを戻した。

「まだかね……。こっちは急いでるんだよ……」

犬人の男が、そう言いながら腕を組んで、アレンに視線を向けた。
「行こうか……」

アレンがそう言うのと、犬人の男は早々とハンターズギルドから出て行った。

「アレン……。油断するなよ……」

ダンガスが、アレンの肩を叩きながら、そう言った。

「ああ……。大丈夫だ。いつも通りにこなしてくるさ」

そう、言い残しアレンは犬人の男を追って、ハンターズギルドから出て行った。

犬人の男に追いついたアレンは、ギルドでリーヤから聞いた依頼内容についてこの犬人の男に訊いてみる事にした。もちろん、ゆっくりと訊いてる時間はない。今も、現場の駅まで走って向っている。
「走りながらでもいい。現在の状況など出来るだけ簡潔に教えてもらいたい」

「駅構内にモンスター群れが入り込んだ。と、言っても雑魚モンス

ターだ。だが、そいつ等を統率してる奴が厄介なんだ」

犬人の男は、走る速度を落とさずに淡々と状況説明を始めた。

「そんなに強いのか？」

「負傷者だけでも数十人の被害が出ている。私の仲間もやられた……」

「あんた駅員なんだな。そのスーツ姿、どこかで見たことがあると思ったら」

「ああ……。私の名前はリュート、よろしく……」

「どうも。まあ、もう知ってると思うがアレンだ」

「さつきは、不躰な態度ですまなかった。急いでいたからついイライラしててね……」

「構わない。それより、その厄介な奴の特徴は？」

「狼人の男だ……」

「モンスターじゃないのか？」

「どうだろうな……。奴の右腕は化け物染みてはいたが……」

「どういう意味だ？」

「行けばわかるさ」

リュートの意味深な言葉に、アレンは眉を顰めた。

「行けば分かるか……」

アレンは、そう口にするると自嘲気味に口元を緩ませた。

今までも、幾度もなく死線を乗り越えてきたが、今回は今まで以上に危険な仕事になりそうだと、本能的に感じとっていた。

「着いたぞ……。準備はいいか？」

リュートが、アレンを見た。

「ああ。いつでもいい」

アレンは、リュートの目を見て、そつと肯いた。

アレンの目の前には、異様な雰囲気に包まれたアルパス駅があった。

「例の狼人の男の所まで案内できるか？」

アレンが、リュートに訊いた。

「大丈夫だ……」

リユートが、そう言いながら肯いた。

「危険だと感じたらすぐに逃げる。後の事は俺に任せてくれて構わない」

「……」

「どうした？」

「いや……何でもない……」

リユートは、正直驚いていた。まさか自分より遥かに年下の子供に、ここまで頼もしさを感じるとは思ってみなかったからだ……

「さすがだな……。あの受付が言ってた通り凄腕ハンターなんだな……」

「まだ、何もしてないが……」

「何もしてなくても、そう思えてしまうところがだよ……」

「どうでもいい事だな……。先を急ごう……」

「頼んだぞ……」

リユートは、そう言うつと駅構内に入って行った。アレンもその後を追って辺りを警戒しながら、駅構内に入って行った。

駅構内に入り込んだアレンとリユートは、一言も交わさず颯爽と駆ける。リユートは、目的の場所に近づくにつれ、表情を少しずつ強張らせていった。

「怖いのか……」

アレンはリユートの顔をちらりと見上げそう訊いてみた。

「ああ……。怖い……」

リユートは、肩を震わせながらそう答えた。「でも、急がないとみんなが……」

「そうか……。だが安心しろ、俺が必ず何とかしてやる」

そうアレンは言うつと、軽く口元を緩ませた。アレンなりにリユートを安心させてやりたかったのだらう。

それを見たリユートは、走る速度を更に速めた。アレンは普段からあまり感情を表立って出す方ではなかった。

いや、別に自分からそうしている訳ではなくよく分からないのだ。最近になって、少しずつそう言ったものを自然に出せる様にはなってきたものの、やはり初対面の者から見ると、無愛想で何を考えているのか分からない少年に映っていた。

ふと、リユートが立ち止まる。そして、右手を前方に差出してそこを指差す。

「あれだ……」

そう言うリユートを一瞬見やり、アレンはリユートの指差す方を見た。

「あれか」

アレンは、背中に携えてある剣を抜いた。

「アレン……。みんなを頼む……」

「任せろ」

アレンは短くそう答えると、脱兎の如く駆け出した。

目の前には、スライムと呼ばれるぶよぶよとしたゼリー状の物体の緑色のモンスターが所狭しと蠢いていた。数は数十体……。アレンは、躊躇する事なくスライムに斬りかかった。

「おいっ！ 何だお前は！」

スライムと応戦していた一人の犬人の警官がアレンを見て目を丸くしながらそう叫んだ。

「ハンターだ！！ここは俺に任せろ！！」

アレンは、スライムを切り倒しながら警官にそう言った。

「ハンター……だと？」

警官は、アレンを見て思わず我が目を疑った。

あんな子供が……ハンターだと……

しかし、アレンの無駄のない剣捌きを見て、警官は認めざる得なかった。本来スライムは、ダメージを与えてもそこから分裂していき数を増やしていく厄介なモンスターだった。

その攻撃方法は、強力な酸を吐き出してそれを浴びせるといったものだ。

そして、弱った獲物を取り込んで体内でゆっくりと消化して自らの糧とする。仕留めるには、ゼリー状の体から透けて見える黒くて丸い核となす部分を破壊すればいい。アレンは、それを何の問題なくやって除けていた。

すでに、アレンの働きでスライムの半数は仕留められていた。核を失ったスライムは、溶けて液体状になっていた。

そんなアレンを見ていた警官達も、勝機がみえてきたのか猛然と手にしたサーベルを高々と振り上げてスライムに立ち向かって行った。警官達の武器は、支給品の安物のサーベルだったが、スライム相手なら退けはとらないだろう。

そう、今アレンが目になっているこの銀色の毛並みの大柄な狼人の男以外なら……。

「ハンターか……。こりゃ懐かしいな」

狼人の男は、アレンを見てニヤニヤとしながら言った。

「何が可らしい……」

アレンは、剣先を男に向けて睨みつけた。

「いや……。俺も昔ハンターだったからな……」

「何っ！」

僅かにアレンの表情が曇った。この狼人の男は赤いタンクトップに黒い革のズボンの軽装なのだが、それでもここにいる警官達を圧倒するのは、やはりこの男の異様な形、大きさの右腕によるところだろう。

その右腕を見る度に、アレンは全身の毛が逆立つのを感じた。事前にリユートから聞いてはいたが、リユートの言う化け物染みた右腕という例えは正しい表現ではなかった。その右腕は、すでに化け物のそれであった。

「見事な腕前だな……。スライム共が、あっという間に残り僅かだ……」

狼人の男は、僅かに口元を緩めるとゆっくりとアレンに右腕を突き付けた。

「お前は……何者何だ……」

「それが知りたければ、俺を倒すんだな！」

狼人の男が、さっと地面を蹴ってアレンに飛びかかった。アレンは、振り下ろされる男の右腕を、剣で受け止めた。

ガキン！

鋭い金属音が響いた。

「いいねえ。この感じ……」

狼人の男は、快感を感じているのかその体を震わせていた。

この金属音……この腕は……やばい……

アレンは、すぐさま剣を振り上げて、男の右腕を振り払った。

「ゾクゾクするねえ。こんなのは久方振りだ！」

男の二撃目が、アレンの右腹を目掛けてくる。それを再び剣で受け止めると、すぐさまそれを地面に叩きつけた。

この男の腕……鉄みたいに硬い……何なんだ一体……

アレンは男の右腕の異常な硬さに困惑しながら、次にくる攻撃に備えた。

くるっ！

アレンは、男から発せられる殺気を感じとり剣を頭上に構えた。その刹那男は高く跳躍し、アレン目掛けて体ごとその右腕を叩き下ろしてきた。

まずいつ！

そう思った瞬間信じられない衝撃がアレンを襲った。全体重をかけて振り下ろされた右腕は、アレンの剣に止められたが、それを受けるアレンには凄まじい衝撃を与えていた。

「ぐっ！」

アレンは、奥歯を噛み締めて衝撃に耐えた。

「どうした？　こんなもんか？」

男は右腕を振り上げ、もう一度振り下ろした。

「がはっ！」

アレンは、今度は衝撃を受け切れず片膝をついた。

「アレン！」

それを見ていたリユートが思わず叫んだ。

「大丈夫だ！ 言っただろ……俺が必ず何とかしてやるってな！」
そう叫びながら、アレンは男の右腕を薙ぎ払った。

「はっ！ 何言ってやがる。お前は俺に勝てねえよ……こんなに弱いによぉ！」

今度は、アレンの心臓を目掛けて右腕を突き刺してきた。それを、アレンは剣で往なすと、そのまま男の右腕に剣を振り下ろした。

ガキン！

鋭い金属音がアレンの耳を劈いた。

「無駄だ！ 俺のこの右腕は、絶対に切れねえぜ！」

「ああ……そうだな……。だが、燃える」

「何っ！」

目を見開く男が見たものは、徐々に赤く光っていくアレンの剣だった。そして、それは次第に熱を持ち、真赤に燃え上がった。

「ぐあああぁっ！ 熱いつ！ 燃えるっ！」

狼人の男は、燃え盛る自分の右腕の炎を慌てて消しにかかる。しかし、それは中々消えなかった。

やがて、男の右腕を焼き尽くした炎は、ゆっくりと消えていった。まるで意志が在るかのよう……。

「がっ……はっ……」

黒く炭の様になった右腕を左腕で庇う様に抱きながら、男はその場に仰向けで倒れた。

「あとは警察の仕事だ……が、その前に訊く。お前は一体何者なんだ……」

アレンは、今だ燃え盛る剣を男に向けた。

「いいねえ……あんた……。あんたも充分に化け物だな……。その力……一体何だ？」

「質問してるのはこっちだ……答える！」

「いずれ分かるさ……。もう、始まっている。ああ……ハンターや

つてた頃に…… あんたに出会えてたら…… よかったのにな……」

「始まっている？ 何がだ……」

そうアレンが問い質すも、男はすでに気を失っていた。アレンが、剣に纏わりつく炎に向かつて何かを呟くと炎はゆっくりと消えていき、アレンは鞘に剣を収めた。

「アレン！」

リユートが、アレンの元に走ってきた。見れば辺りのスライム達も警官達の手によって全滅していた。

「依頼達成だな……」

アレンが、リユートに力なくそう言った。先ほどの戦いのダメー
ジが、思った以上に酷く、立っているのもやっとだった。

「無理するな。今、医者を呼んでくる」

「いや、どこか休める場所に連れて行ってくれないか？」

「分かった……」

リユートは、身を低くするとアレンの右腕を自分の肩に廻してそのままの姿勢でゆっくりとアレンに負担を掛けない様に歩きだした。
「さっきの炎……。凄かったな、あれは？」

リユートは、先程の戦いの中でアレンが見せた炎の事をアレンに訪ねた。

「俺の能力みたいなものだ。ただ、恐ろしく燃費が悪いんでな。そう、ほいほい使えないけどな……」

アレンは、眉を八の字に曲げて苦笑した。「恐ろしいか……」

アレンは、自分のこの力が好きではなかった。出来れば余り使いたくはなかった。大抵の場合この力を使うと、皆アレンの事を化け物を見るかの様な目で恐れる。

結局……俺自身もさっきの奴が言ったように、化け物とそう大差ないって事かもな……

「凄いな。なんか格好良かった……」

そう言つてのけるリユートの顔を除き見たアレンは、その言葉に嘘がない事が分かり慌てて顔を反らした。

「どうした？ 私の顔に何かついてたのか？」

「いや……何でもない」

アレンは、顔を反らしたままそう答えた。

「ありがとうな……」

「えっ？ 今、何か言ったか？」

アレンの小さな感謝の言葉を聞き取れなかったリユートが、アレンに訊き返すがアレンは首を横に振って、

「何でもない……」

と、素っ気なく答えるアレンだが、その顔は少し赤く染まっていた。しばらくの間、無言で歩いていると目の前に「仮眠室」と書かれたプレートが貼り付けてあるドアがアレンの目に映った。

「ここならゆっくり休める」

そう、リユートが言つと、ゆっくりと手を伸ばしてドアノブに手を掛けた。

第二話 出会い

そこは、建物の中にある大きな庭園だった。辺りには一面に種類豊富な花が咲き乱れて、まるで、天国を連想させるとても美しい場所だった。

そしてその庭園の丁度中央に位置する場所には、とても大きな木一本だけ根強く大地にしっかりと根を張っており、その木に寄り添うように二人の子供の獣人が座っていた。一人は白い毛並みの猫人の少年で、もう一人は茶色い毛並みの狸人の少年だ。

「なあ、俺が死んだらさ……。悲しいか？」

「なっ？ 何だよお！ 突然に！」

猫人の少年の突拍子のない言葉に、狸人の少年は目を丸くして声を張り上げた。

「もしもって話だよ？ なあ？ どうなんだ？」

「そんなの……。決まってるじゃん……。僕、泣いちゃうよ……」

狸人の少年は、目に涙を溜めながら、今にも泣き出しそうな顔で猫人の少年を見た。

「おいっ？ 何だよ……。泣くやつがあるか……」

「なっ……。泣いてなんかないもん！」

狸人の少年は、慌てて右腕を顔にもってくると、白いローブの袖で涙を拭った。

「何だか最近おかしいんだ……。あいつ等に、変な機械とかつけられたり、首筋に何か注射されたりさ……。時々あいつ等が言うんだよな……。適応者とか……。キメラとか……」

「何だよそれ？ どうして僕には一言も言ってくれなかったの！」

「お前を心配させたくなかったんだよ……。でも、もう自分でも分かるんだ……。俺の体が俺じゃなくなってきたみたいなんだ……」
「マック！」

そう叫んだ狸人の少年は、猫人の少年を力強く抱き締めた。「こ

めんね……」

「何だよ……何でお前が謝るんだよ……」

「僕がこんなだから……マックに余計な気まで遣わせて……本当は、怖かったんだよね……？　ずっと独りで辛かったよね……」

「ばっ！　馬鹿野郎！　怖くなんてない！　お前に泣かれる方がずつと辛いんだぞ！」

マックと呼ばれた猫人の少年は、狸人の少年の頭を優しく撫でた。狸人の少年は、小刻みに震えながら泣いていた。

「何で……僕じゃなかったんだろう……。何でマックが……」

「俺は、お前じゃなくて良かったと思う……。お前が化け物にならなくて本当に……」

「まだそうなると決まった訳じゃないよっ！　大丈夫……だよ……きつとまだ何か助かる方法が……きつと僕が……」

「お前は優しいな……。そんなお前だからかな……。俺も、今だけは素直になっていいかな？」

「うん……」

「うわあああああっー！」

マックは大声を上げて泣いた。「怖いよ！　化け物になるのは嫌だ！　死ぬのは嫌だ！　ずっとお前と一緒に生きたいよ！　外の世界に出たいよ！　一緒に海を見たいよ！」

「大丈夫……。僕はずっとマックの傍にいるから……。どんな事があってもずっと……」

マックの耳元で、そう囁いた狸人の少年は、今度は自分がそうされたように優しくマックの頭を撫でた。

「ずっと……俺達は友達だよな……？」

「うん……ずっと、ずっと……」

狸人の少年は、マックの背中を摩りながら答えた。

「ありがとう……。アレン……」

「マックっ！」

そう叫びながら、アレンはベッドから上半身を勢いよく起こした。

「……夢？」

アレンは、全身が汗でびっしょりと濡れているのに気がついた。そして、何より自身から溢れ出てくる涙に、同様が隠せずにいた。

ここは……確かアルパス駅……

寝起きで上手く回らない頭を押さえながら、薄暗い部屋を見回したアレンは、ここが駅構内にある駅員の仮眠室である事を思い出した。

そうか……あの後、あの戦いのダメージと力を使った反動で、ここで休んでたんだっけな

アレンは、ベッドから起き上がるとゆっくりと体の至る所を伸ばして、異常が無いかを確認すると、再びベッドの腰を下ろし先程の夢について考える事にした。幸い、他のベッドには誰一人寝ておらず、考え事するにはもってこいだった。

今……ようやく分かった……。あのいつも見る夢に出てくるのは……幼い頃の俺自身だったんだ……。そして、あいつは……マックは……

アレンの記憶は、ある頃を境にすっぱりと抜け落ちていた。今ある記憶は、フォルグに拾われてから、今まで育てられてきた八年間の記憶しかない。アレンの見る夢は、その空白の記憶の断片だったのだ。

だが、すべての記憶を思い出した訳ではなかった。

だから俺は……あそこに行かなければならない……

そう、いつも見るあの夢の場所に……。そこに行けば何か思い出すかも知れないし、もしくは思い出したくない記憶をも呼び覚ますことになるかも知れなかった。ただ、今のアレンには、あの猫人の少年マックの事が気掛かりだった。おぼろげだが思い出した大事な友達の話が……。

「アレン！ 開けるぞ？」

そう声が外から聞こえたかと思うと、ダンガスが部屋の中に入ってきた。

「ダンガス！ 一体どうしてここに？」

「どうしてもこうしてのないぞ！ お前がなかなか帰って来ないから心配になって迎えにきたんだぞ」

「そんなに経つのか？」

「もう朝の八時をまわつとるぞ……。ここは窓が無いから気がつかないのも無理はないけど……」

「そうか……。ところで、依頼完了の報告は……」

「ちゃんと受けている……。早くギルドの戻って報酬を受け取れ」

「そうだな。その後は風呂に入ってから朝飯だな……」

アレンはベッドから立ち上がると、ベッドの脇に立てかけてある自分の剣を手に取り、ダンガスと共に部屋を出た。

「アレンっ！」

仮眠室から出てきたアレンに、手を振りながらリユートがこちらに向かって走ってきた。

「ありがとう。おかげで良く眠れた」

アレンが、右手の人差し指でぽりぽりと顎の下を掻きながらリユートにそう言うと、リユートは笑いながら肯いた。

「でも良かった元氣そうで……？ アレン、泣いてた？」

そう指摘するリユートに、アレンは自分の顔に涙の跡が残っているのに気がついた。

「ん……。ちよつとな……」

アレンは決まりが悪そうに、そう答えた。

「ん？ 本当だ……。何だ、寂しかったのか？」

アレンの顔を覗きこんだダンガスが、意地の悪い笑みを浮かべながらアレンをからかった。

「ああ……。そうかもな……」

アレンは少し悲しげな顔をして、その場から去って行った。

「おっ！ おいつ待てよ、もしかして怒ったのか？」

慌ててダンガスもアレンの後を追った。その背後で、リユートが深々と頭を下げた。

「で？ 今回の相手は強かったのか？」

テーブルの上に、こんがり焼けたトーストと程よい加減で半熟に焼いてある目玉焼きを並べたダンガスが、タオルで頭を拭いているアレンに訊ねた。

「ああ、かなりの使い手だった……」

風呂からあがったばかりのアレンは、白いシャツにジーンズのラフな格好をしており、目の前に並べられた朝食に目をやると、テーブルについた。それを見たダンガスがアレンの目の前にコップに入った牛乳を置いた。

「お前にあの力を使わすぐらいだもんなあ」

「誰かに訊いたのか？」

「あの場にいた連中にな」

「とにかく、ここしばらくはハンター業を休む事にする」

「何だ？ どこが悪いのか？」

「いや、ちよつと調べたい事があつてな。しばらくアルパスを留守にする」

「どこに行くんだ？」

「それをこれから調べるんだよ……。その為にはフォルグの協力が必要なんだけどな」

「わしじゃ力になれんか？」

ダンガスが心配そうにアレンを見た。

「ありがとう……。気持ちだけ受け取っておくよ……」

「何か困った事になったらいつでもわしを頼れよ。お前さんはわしの大事な友人だ」

「俺も……。同じだよ。あんたは大事な友人だ」

そう言ったアレンは何故か胸にちくりと棘が刺さる感じがした。

頭の中には、マツクの顔がちらついてくる。

ずっと……友達か……

「どうしたアレん？」

「いや、何でもない……。さあ、せっかくダンガスが作ってくれたんだ。冷めないうちに頂くか」

「おうっ！ 喰え喰え……。わしは自分の家に戻つとるからな」

そう言い残し、ダンガスはアレンのアパートの部屋から出て行った。

朝食を食べたらまずはフォルグを探さないとな……

アレンは、フォルグの居そうな場所をあれこれ考えながら、朝食に手をつけた。

朝食を食べ終えたアレンは、アルパスの街を一人フォルグを探して彷徨っていた。

「どこににいるんだ……？」

そう呟きながらアレンは溜息をついた。フォルグは一流ハンターで、人前には滅多に姿を見せない。そのうえ神出鬼没で、その足取りを辿るのはまさに至難の業だった。

散々歩き回って、少し疲れたアレンは近くの公園の入り、自動販売機で缶コーヒーを買うつと、ベンチに腰掛けた。

全く……かくれんぼじゃあるまいし、いい加減見つかつてくれよ

……

アレンは、缶コーヒーの蓋を開けると、一気に飲み干した。冷たいコーヒーが喉を通り過ぎ胃に落ち着くと、アレンはベンチの背もたれに凭れ掛かった。そして、空になった缶コーヒーを見つめると、今度は自動販売機の隣に設置してあるくずかごに視線を移し、徐に空き缶をくずかご目掛けて投げた。

カンッ！

空き缶は、くずかごの淵に当たり地面に落ちていった。

「はああ……」

大きな溜息をつきながら、アレンが空き缶を拾いにベンチから立ち上がると、先程アレンが外した空き缶を、一人の虎人の少年が拾い上げてくずかごに放り込んだ。

「あつ！ すみません……」

アレンは、慌ててその虎人の少年の所まで駆け寄った。

「惜しかったね」

と、虎人の少年はにっこりとアレン笑いかけた。どうやらアレンがくずかごに入れ損なった空き缶の事を言ってるらしい。

「あ……ああ……」

アレンが、右手で後ろ頭を掻きながらそう返事をした。

「ちよつと、いいかな？」

「ん？ ……」

「フォルグってハンターを見ませんでした？」

そう言って、虎人の少年はズボンのポケットから一枚の写真を取り出して、それをアレンに見せた。

「フォルグ！」

「えっ？ 知ってるんですか！」

「俺も探してるんだ」

「本当ですか！」

写真をポケットにしまいながら、虎人の少年は驚いた様子でアレンを見つめた。

「ああ……。君もそうなんだな……」

「ええと、僕はエドガーって言います」

「俺はアレンだ」

「あの、もし良かったら一緒に探しませんか？」

「そうだな……。そのほうが効率がいいしな」

「じゃあ、改めて……。よろしくねアレン！」

「こちらこそ。エドガー」

二人は、微かに笑みを浮かべると、互いに手を差し出して握手を

交わした。

エドガー。黄色い毛並みに黒い毛の模様があり、口元から胸と腹にかけて白い毛で覆われていて、瞳の色は薄い焦げ茶色。そして、尻尾は黄色と黒の縞々模様で少し太くてしなやかだ。

歳は十五歳。身長は一七〇ぐらいで、体型は細身。緑色の少し厚めの服に、赤いカーゴパンツを穿いていた。

アレンとエドガーは、共通の探し人を求めて、再びアルパスの街を駆けずり回った。

アレンとエドガーの必死の搜索にも関わらず、已然としてフォルグは見つからなかった。アレンにしてみれば覚悟はしていたが、予想以上に手こずりそうだった。

「やっぱり見つからないな……」

と、アレンは肩を竦めて苦笑した。今、二人はファーストフード店にいる。散々歩き回って既に日も落ちかけていた。

「だよねー。まあ、そう簡単には見つかるとは思ってなかったけど

……」

そう言いながら、フライドポテトを口に運んだエドガーが溜息混じりにそう言うと、アレンは同意するように肯いた。

「俺が最後に会ったのが一週間前だからな……。そろそろ仕事の方も片付いてる頃だと思うんだがな」

「あーあ。家さえ分かれば直接会いに行くのになあ……」

「フォルグは基本居住しないから……。どこかのホテルか、もしくはどこかで野営でもしてるか……。どちらにせよ足取りは掴みにくいな……」

「ところでさ……。アレンはいくつ？」

「歳か？ 唐突だな」

「ごめん、ごめん。ちょっと気になったからさ……」

「十五だ」

「あつ！ 僕と同じ年だ」

エドガーが嬉しそうに笑った。

「そつか……。同じ年だったんだな」

アレンも表情には出さないものの、心の中では嬉しいと思う感情が沸いてきていた。そもそもハンターを生業にしてる以上、アレンは同世代の子供と話す機会など滅多にないのだ。

「アレンはさあ……。学校はどこに行ってるの？」

エドガーのこの何気ない問いに、アレンは眉根を寄せた。「あつ

！ ごめん……。もしかして訊いちゃいけなかった？」

「いや……。そうじゃないんだ。俺は、学校というものに通った事がない」

「えっ？ そうなの？」

「ああ。俺はハンターだ」

「へえー。ハンターなんだ……。つて！ ええっ！」

エドガーは目を丸くした。「ほんとに？」

「嘘を言っでどうする」

「でも、ハンターって子供でもなれるの？ それに危なくない？」

「まあ……。俺にハンターとしての技術や知識を教えてくれた人が凄い人だったから……。ハンターにも、その人の推薦があつたらなれたようなもんだな」

「そうなんだ……。ねえ、凄い人ってどんな人なの？」

エドガーは、目を輝かせてアレンを食い入るように見た。そんなエドガーの視線に、アレンは多少居心地の悪さを感じたが、それでも不思議と嫌ではなかった。

「エドガーと俺が今探してる狼人さ……」

「へっ？」

「フォルグは俺のハンターの師匠だ。そして、身寄りのない俺をここまで育ててくれた兄みたい人でもあるんだ」

アレンは少し照れながらエドガーにそう言った。

「そっか……」

エドガーは、俯いたままそう呟いた。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

「ううん。そうじゃなくてさ……アレンってその……家族が……」

と、エドガーがアレンの顔を悲しげな顔で見つめた。その様子に、アレンはエドガーが何を言いたいのか理解した。

——まいったな……気を遣われてるみたいだ……

アレンは困った様に右頬を掻くと、

「確かに産みの親はいないが、家族はちゃんといるんだぞ？」

と、困り顔で笑って見せた。

「本当に？」

「ああ……。フォルグは俺の兄みたいなもんだし、ダンガスって熊人のおっさんも俺を息子の様に思ってくれている……。まあ、俺も本人の前では口にはしないがダンガスの事は父親みたいに思ってるんだ……。だから、寂しいとか独りぼっちとかじゃないから……そんな顔するなよ」

「あつ！ ごめん……」

エドガーは慌てて笑顔を作った。「もしかして……気を遣ってくれた？」

「それはお互い様だろ……」

と、アイスコーヒーを口に運びながらアレンはエドガーにそう言い放った。

「はは……だよね……」

エドガーは後ろ頭を掻きながら苦笑した。

「そんな事より、家に帰らなくてもいいのか？ もう七時をまわってるぞ？」

と、アレンが店内の時計を見てそう言うと、エドガーは苦笑しながら首を横に振った。

「二人とも、仕事が忙しくて暫く家に帰って来れないんだ。だから大丈夫だよ」

そう言って、エドガーは胸元にぶら下げてあった自宅の鍵を取り

出して、アレンに見せた。

「そうか……」

アレンがそう言いながら肯くと、エドガーは再び自宅の鍵を胸元に仕舞い込んだ。

「両親は何の仕事をしてるんだ？」

「どっかの研究所で働いてるよ……。今、研究の最終段階の調整が何とかで凄く忙しいんだって」

「そうか、ならもう少しフォルグを見つけ出すのに協力してくれないか？」

と、アレンは笑みを浮かべてエドガーにそう言つと、

「うん。それに、フォルグに会いたいのは僕も同じだしね」

と、尻尾を嬉しそうに上下に動かしながら、エドガーが答えた。

「よし、そろそろ店を出る……あっ！」

「何？ どうしたの？」

何かを思い出したように苦笑するアレンに、不思議そうにエドガーが何事かと訊ねると、

「いや、実は今日の仕事の報酬をまだ受け取りに行つてなかった」

と、今だ報酬を受け取りに來ない自分の事を待っているギルドの受付の狐人を思い浮かべたアレンは、耳を伏せて決まりが悪そうに俯いた。

「僕、初めてギルドの中に入ったよ……結構広いんだね」

そう呟いたエドガーに、アレンは申し訳なさそうに軽く肯いた。

「すまん。付き合わせて」

「ううん。いいよ……」

二人はハンターズギルド内にある待合室にあるソファに座つて、アレンの報酬が手渡されるのを待っていた。もちろん、アレンは色々を受付のリーヤに小言を言われる羽目になったが……。

「それより、エドガーは何でフォルグを探してるんだ？ 仕事の依

頼なら始めからここに来ればいいからな」

「うん。仕事の依頼じゃなくて、フォルグ自身に用があつたんだ。でも、手掛かりがフォルグの写真一枚だけだから思った以上に難航してさ……」

「それにしても写真一枚で素人が人探しとは……」

「もう、かれこれ三日目になるけどな」

「ははは……。まあ、最悪ギルドで張り込んでればいずれ会えるだろうけどな」

「あつ！　そう言えばそうだね」

「でも安心しな……。俺と一緒にそんな事しなくてもすぐに見つけてやるさ」

と、アレンが真顔でそう言うと、エドガーは笑いを押し殺す様に笑い出した。

「何が可笑しいんだ？」

と、アレンが首を傾げると、

「アレンってさ……。嘘がつかないタイプでしょ？」

と、エドガーが腹を抱えながら必死に笑いを堪えながらアレンに訊ねた。

「そもそも嘘なんてついて何の得があるんだ？」

訳が分からないといった顔でエドガーを見るアレンにエドガーは顎を摩りながら、

「素直で馬鹿正直で……。それで自信家で……。なんか可愛いよね」

と、そう言った。それを聞いたアレンは、

「か、可愛い？　どこが？」

と、ますます訳が分からないという顔した。

「いや、なんていうかな……。今じゃ珍しく純真な奴だからかな？」

それでいてハンターなんて危険な仕事をしててさ……。それも僕と同じ年でさ、なんか意外性を物凄く感じるどころか……」

「言ってる意味が分かるのだが……」

「思わずからかいたくなるだろ？」

二人の背後から突然そう問いかけられ、アレンとエドガーは同時に後ろを振り向いた。

「フォルグ！ どうして？」

アレンが哑然としてるなか、エドガーはまじまじとフォルグを見つめていた。

「おっ！ アレンの友達か？」

と、フォルグがエドガーに目をやると、エドガーは慌てて立ち上がりフォルグにお辞儀をした。

フォルグ――。

全身を覆う銀色の美しい毛並みの狼人の男で、スラリとした長身で尻尾は長い銀色の毛で覆われている。瞳の色は吸い込まれそうなほど綺麗な金色。そして、何より全身を黒一色の忍び装束が目まぐるしく覆っていた。

「どうも、初めまして。エドガーと言います」

「これはどうもご丁寧に。俺はフォルグ」

そう言っただけでフォルグは二人の前まで歩いていくと、エドガーに手を差し出した。それを見たエドガーが慌ててその手を握った。

「あの、フォルグさんをお願いがあるんですが」

「ああ、フォルグでいい。それより何だい？ お願いつて」

エドガーは、握っていた手を離すと、ズボンのポケットから封筒を取り出して、それをフォルグに手渡した。

「これをフォルグに渡せって父と母に頼まれたんです」

「なるほど…… ちょっと読んでいいかな？」

「あつ！ はい……」

エドガーにそう断りをいれたフォルグは、糊付けされた封筒の封を丁寧に剥がすと、中から一枚の手紙を取り出して内容を確認した。

「なるほど……。どうやら君のご両親はかなり厄介な事に巻き込まれているみたいだな……」

「厄介な事ですか？」

訝しげにそう訊いたエドガーに、フォルグは眉を僅かに顰めながら

そつと肯いた。

「君のご両親は何やら善からぬ研究を無理やりやらされてるみたいだ……。それで、俺に助けを求めて君にこの手紙を託した……。手紙の内容によると監視下に置かれてるみたいだから、誰かに表立って助けを求められないみたいだしな」

「そんな……」

エドガーが、目を見開いたまま絶句した。

「どうやら、俺の事はハンターズギルドのホームページで調べたらしいな」

「……。なら、この写真もそこからプリントアウトしたもの何ですな……」

そう言いながら、エドガーがズボンのポケットから一枚の写真を取り出した。そこにはフォルグが写っていた。

「それに、エドガー……。君は人質になっている。ご両親が下手な真似をしないようにね……。手紙には君の保護も書かれていたよ」
「それにしてもフォルグが見つからなかったらどうするつもりだったんだ？」

と、それまで黙って話を聞いていたアレなが、フォルグを見上げる様に見つめたままソファから立ち上がった。

「いずれ、俺から接触していただろうな……。誰かが俺の事を嗅ぎまわってる事は分かっていたからな……」

「そうか、エドガーの親はそれも計算に入れていた訳だな……」

「そう言う事だ。とりあえず今日のところはアレンのアパートに……」

……

「分かった。けど、俺もちょっとやらなければならない事があるんだ。悪いが協力は期待しないでくれよ」

「ああ……分かった。それでいい」

「あと、フォルグに訊きたい事があるんだ……」

「分かった。なら、俺もお前のアパートに行こう。話しはそこでしよう」

「悪い。手間をかける」

アレンが軽く頭を下げた。

「何言つてんだ。お前は俺の弟みたいなもんだ。遠慮なんてしないでいい……。つてか、たまには俺を頼れ！」

と、歯を剥き出して二カツと笑いながら、フォルグはアレンの肩を軽く叩いた。

「と、すまんエドガー……。そう言う訳で今日はアレンの所に泊まってくれないか？」

「ええと、それは構わないんですが、僕が人質になってるって言うのがいまいち分らないですけど……」

エドガーが首を傾げながらそう言うのと、フォルグは右手で頭の後ろを掻きながら苦笑いを浮かべた。

「つまり、君のご両親が下手な真似をすると……」

フォルグが言いにくそうに天井を見上げた。そんな様子を見ていたアレンは、溜息をつきながらフォルグの言葉を付け足すようにこう答えた。

「エドガー。君の命の保障がないって事だ」

「ええと、つまり何かあると僕は真っ先に殺されるって事ですか？」

「そうだ。まあ、フォルグなら何とかしてくれるだろうから、そんなに心配はしなくてもいいと思うがな……」

「買いかぶり過ぎだっつーの！ でも、俺が依頼を引き受けた以上は大船に乗ったつもりでいいぞ」

「それじゃ……」

フォルグの言葉に、エドガーは聞き返すように訊ねた。

「うむ。この依頼引き受けよう。君とご両親は必ず安全な場所に逃がしてみせるさ」

と、フォルグは右手の親指を突き立てた。

「よろしくお願いします」

そう言ったエドガーは、深々と頭を下げた。

「おう！ 任せときな！」

豪快に笑いながら、フォルグはエドガーの頭を乱暴に撫でた。

「アレ！ 精算が済んだよ」

と、ハンターズギルドの受付から、リーヤの声が聞こえると、アレはすぐさま報酬を受け取りに受付まで向かった。

第三話 語られし過去

熱いシャワーを浴びながら、エドガーは自分が今になってとんでもない事に巻き込まれている事を今更ながら感じていた。

今、こうして一人になる時間がエドガーに物事を冷静に整理する時間を与えてくれる事もあり、この先の事を考えると、不安で仕方なかった。

アレンの住むアパートの一室――。

そこで、エドガーはアレンの行為で風呂を借りていた。風呂場は思ったより広く、ユニットバスまで付いていた。それに加えて、風呂場はカビ一つなく綺麗で、アレンが日頃掃除をまめにしている事が窺えた。

「僕……。もう、普通の生活に戻れないのかな？」

そんなエドガーの搾り出すかの様な声も、シャワーの音に消されてしまう。

それでも、エドガーは努めて明るく振舞おうと、風呂場に設置してある鏡に向かって笑顔を作ってみせた。

「大丈夫！　きっと大丈夫だよ」

と、自分に言い聞かせる様にそう呟くと、シャワーのコックを捻っってお湯を止めた。

ダイニングにあるテーブルの椅子に、向かい合わせに座っていたアレンとフォルグは、しばらくは他愛のない近況報告や、世間話などをしていたが、互いに話す事が無くなるとフォルグが軽く溜息をつきながらアレンに訊ねた。

「訊きたい事があるんだろ？」

「ああ……」

いざとなると切り出し難くて、関係のない雑談などして誤魔化し

ていたアレンドが、自分の本来の目的は過去を知る事である以上、フォルグからどうしても訊かなければならない事があった。

「俺は……どこでフォルグに拾われたんだ？」

アレンのその一言に、フォルグの表情が少しばかり曇った。

「訊いてどうする？」

と、訝しげにアレんにそう答えると、

「確かめるんだ。俺の過去をな」

と、アレンは躊躇なくそう返答した。

「そうか……」

そう答えたフォルグの表情はどことなく寂しげだった。

「フォルグ、俺は今までフォルグに拾われる以前の記憶が無かった……。けど、少しだが思い出したんだ。だから、俺は行かなければならない……」

「行かなければならない？ とは」

「いつも見る夢の場所さ……。俺はそこにいたんだ」

「アレんがいつも見るっていうあの夢の事か？」

フォルグがアレんに訊ねると、アレんは黙って肯いた。

「推測だが、そこから逃げ出した俺はやがて力尽きて倒れてしまったところをフォルグに……」

「成程な……。まあ、いつかこんな日がくるかとは思っていたが、寂しくなるな……」

「すべて思い出したらまたここに戻ってくるさ」

「ああ……待つてる。お前の帰るべき場所はここだから……。それだけは忘れるなよ？」

「そうだな……。ありがとう」

アレんは胸が熱くなるのを感じていた。自分にも帰るべき場所がある事をあらためて実感できたからだ。

「さて、そろそろお前が訊きたがってた事でも話すかな……」

と、フォルグがアレんからそっと視線を逸らすとそのまま天井を見上げた。

「あれは、今から十年前になる。俺はハンターとしての腕を磨く為、世界各地のハンターズギルドを旅して回り、数々の依頼をこなす中で次第にその名も知られる様になっていた……」

昔を思い出すように、そっと目を瞑ったフォルグはやがてゆっくりと目をあけるとそのままアレンに視線を移した。その表情は、どことなく険しかった。

「それから二年程経った。俺は帝都グラデスに半年程滞在していた。帝都は大都市だけあってそれなりに仕事もあってな、俺は日々忙しく帝都を駆けずり回っていた……」

「帝都グラデス……」

今まで黙ってフォルグの話を聞いていたアレンが、初めて口を開いた。「何だか……懐かしい感じがする……」

「そうだろうな……。俺がお前と初めて出会ったのが帝都だからな

……」

そうフォルグに告げられたアレンは、少しずつであるが記憶が戻りつつある事に気付いていた。

「月夜の綺麗な晩だった。仕事を終えた俺は滞在していたビジネスホテルに帰る途中で、微かな呻き声を耳にした。どうせどつかの酔っ払いだろうと思ったが、どうにも気になってな……俺は呻き声のする方に足を運んだ。そこは飲食店の裏のゴミ捨て場だった。そこで俺が見たのは必死になって残飯を漁る傷だらけの一人の狸人の子供……そう、アレンお前だ」

話をしてる最中ずつと辛そうにしているフォルグにとって、あまり思い出したくない事だったのだろう。それだけ出会った当時のアレンは余りにも痛々しい姿だった。

「フォルグ……？」

そんなフォルグの様子に、アレンは心配そうに見た。「大丈夫か？ 無理しなくてもいいんだぞ。もう行くべき場所は分かったんだし……」

「いや、話しておきたいんだ。それにお前も知るべきだと思う……」

そう言うと、フォルグは静かに口を開いた。

月明かりに照らされるその狸人の少年を暫くの間、ただ呆然と見ていたフォルグは、やがて飲食店の裏口から一人の人間の男が出てくるのに気が付いた。男の格好はスーツに蝶ネクタイで、どうやらこのウェイターの様だった。ウェイターの男は、少年に気が付くとその表情をまるで穢らわしい者でも見るかの様に変えて、怒鳴りながら少年に近付いて行った。

「またお前か！ 何度言ったら分かるんだ！ このクズが！ お前みたいなのがウロウロしてると店のイメージが崩れるだろうが！」

そう言い放つと、男は少年の腹を思いっきり蹴飛ばした。その衝撃で、少年はその場から転がりながらフォルグの足元まで蹴り飛ばされた。

「あん？ 何だ？」

男は、フォルグの存在に気付くと睨みながら悪態をついた。だが、フォルグは男など既に眼中になく、足元に転がる少年に視線が注がれていた。少年は、腹を押さえて苦しそうに悶えていた。至る所傷だらけで、着ている白いローブもあちこち破れてボロボロだった。その様子を見ていたフォルグは、胸の奥に何やら熱いものが湧き上がるのに気が付いた。

それは怒りだった――。

フォルグはその場に屈み込むと、少年をそつと抱き上げた。少年は今も苦しそうに顔を歪めている。フォルグは、そのまま少年を抱いたままその場を立ち去ろうとした。

「おい！ 待てよ。あんたその餓鬼の知り合いか？ こっちはその餓鬼のせいでえらい迷惑してたんだ。連れてくつもりならそれなりのもんを貰わないと……」

と、意地の悪い笑いを浮かべながら、男はフォルグに近付いて来た。

が、次の瞬間男は盛大に吹っ飛んだ。

「これで足りるな……」

そう言い放つと、フォルグは男を蹴り飛ばした右足を地面に下ろし、男に背を向けるとその場から去って行った。

「ここは……？」

目を覚ました狸人の少年は、ベットの脇の椅子に座り込んで心配そうに自分を見ている狼人の男に気が付いて慌てて起き上がった。

「いつ！ 痛っ……」

「おいっ！ 無理すんな。まだ大人しく寝てろ」

そう言いながら、男は少年の身体を無理やりベットに寝かしつけた。

「あの……ここは……」

少年は恐る恐る男に尋ねた。

「安心しろ。ここは今俺が滞在してるビジネスホテルだ。俺は、フォルグ。ハンターだ」

と、少年を安心させる様に、フォルグは歯を剥き出してニカッと笑った。

「フォルグ……？ ハンター……？」

少年は、何が何だか分からない様子でフォルグを見つめた。

「お前の名前は？」

「……アレン……」

と、アレンと名乗った少年は、小声でそう言つとフォルグ耳をピンと立てて、

「よく聴こえないぞ！ もっと大声で言え！」

と、低く唸った。その様子に、アレンは慌てて出来る限りの声でもう一度名乗った。

「アっ、アレン！」

「よーし……。何だちゃんと言えんじゃねーか」

と、少し乱暴にアレンの頭を撫でた。その感触にアレンは体中に暖かなものを感じた。

「あの……？ 僕……」

「ん？」

アレンの頭から手を退かしながら、フォルグはアレンの顔を覗き込んだ。「どうした？」

「どうしてここにいらっしゃるんですか？ それに服も着てないし……体中に包帯が巻いてあるし……」

掛け布団を捲りながら自分の身体をまじまじと見回したアレンは、訳が分からないといった様子で、フォルグに訊ねた。

「憶えてないのか？ 何も……」

驚きの表情を隠せないフォルグは、アレンの両肩を優しく掴んで訊きかえした。

「う、うん……。名前と、あと歳ぐらいしか思い出せない……」

と、俯きながらそう答えるアレンを、フォルグはそっと抱きしめた。

「そうか……。なら、思い出さなくてもいい……」

「えっ？」

「なあ、アレン？ 俺と暮らさないか？ お前を養うぐらいなら何とかなる……」

フォルグの突然の申し出に、アレンは目を丸くした。

「で……でも、迷惑になると思うし……」

「迷惑じゃないさ……。それに、アレン一人でこれからどうやって生きていくつもりだ？」

「そ、それは……」

「大人の言う事は大人しく聞くもんだぞ。アレン！」

と、アレンから離れたフォルグが右手の人差し指をアレンの鼻先に押し当てた。

「は、はい……」

「よしっ！」

そう言うと、フォルグは腰に手を当てて笑った。つられてアレンも笑い出した。

「で？ 歳はいくつだ？ 憶えてるんだろ？」

「う、うん。七歳だよ……」

「そうか……。誕生日は憶えてるか……？」

「ううん……。思い出せない……」

そう言いながら首を横に振るアレンに、フォルグは大声で突然叫んだ。

「誕生日おめでとうアレン！」

「？」

フォルグの突然の言葉に、アレンは呆然とした。

「今日がお前の七歳の誕生日にするんだよ。何も思い出せないなら、これから新しい思い出を作ればいい。アレン、今日からお前は俺の弟だ。俺の事は兄ちゃんと呼べ！」

「に……兄ちゃん……」

フォルグにそう言われ、アレンはフォルグを見上げてそう言った。面と向かって兄と呼ばれたフォルグは、新しい家族が出来たみたいで嬉しくなった。その尻尾は小刻みに揺れている。

「アレンの怪我が治ったら、誕生パーティーやろうな。それに、プレゼントも買わなきゃな！ おっと、まずは着る物を用意しないと。着ていた服はボロボロだったから捨てちまったしな……」

一人ではしゃぐフォルグを見て、アレンは可笑しくなって笑ってしまった。

「おっ？ 何がそんなに可笑しいんだ？」

そんなアレンの様子に気付いたフォルグが訝しげにアレンを見遣ると、

「だって、兄ちゃん子供みたいなんだもん」

と、アレンは嬉しそうにそう答えた。

「お前なあ……。仮にも色男に向かってそれはないぞ？」

と、右頬を掻きながらフォルグは何ともいえない表情をアレンに

向けた。

静かに息をついたフォルグは、やがて席を立つと大きく背伸びした。その様子を見ていたアレンはそつと口を開いた。

「昔は兄ちゃんって呼んでたんだな……」

「ははは……。そうだな、最近じゃめつきりそう呼ばれなくなって結構寂しかったんだぞ兄ちゃん」

「いつからだろうな……。兄ちゃんと呼ばなくなったのは……」

「ハンターになってからだろ？ あれからアレンは一人暮らしを始めちゃったし、俺はまた宿無しハンターに戻ったって訳だ……」

「何も、借りていたアパートを出る事無かったろ？」

「あの部屋は一人じゃ広すぎんだよ……。全く、今じゃ可愛げもないアレンは……」

「兄ちゃんはある時と全く変わってないがな……」

アレンのその一言で、二人は豪快に笑い出した。

「懐かしいねえ……。お前にそう呼ばれるの……」

「嬉しいか？ 兄ちゃん？」

「馬鹿言えっ！」

「尻尾は正直だぞ、兄ちゃん」

と、アレンが指差す方向には、フォルグの後ろで大きく左右に揺れる銀色の尻尾が顔を覗かしていた。

「忘れていたんだな……。帝都に居た事……」

と、今度は少し悲しげな表情をしながら、アレンが呟いた。

「無理もないさ。あれから実際帝都に居たのが三ヶ月ぐらいだ……。後は、二人で各地を転々としながらようやくここに落ち着いたからな……」

と、フォルグが溜息をつきながらそう言った。

「兄ちゃん……。明後日にはここを出ようかと思う……」

「そうか……。頑張れよ弟よ！」

「兄ちゃんもな！」

そう言いながら、アレンは立ち上がるとフォルグに向かって右手を差し出した。それを見たフォルグはその手を握った。血は繋がらないが、アレンとフォルグは誰が何と言おうと固い絆で結ばれた兄弟なのであった。

「どうも、お風呂ありがとうございました」

と、体中から湯気を立ち上らせたエドガーが、タオルで頭を拭きながらテーブルの椅子に向かい合わせに座ってアレンとフォルグに笑顔で礼を言つと、アレンは首を横に振った。

「別に構わんさ……。それより、寝間着のサイズは大丈夫だったか？」

と、アレンはエドガーの格好を見てそう訊ねた。

「うん。大丈夫だよ」

エドガーは、着ている上下とも緑一色の寝間着を見ながらそう答えた。

「横にぶかぶかじゃないか？」

と、フォルグが意地悪そうにアレンを見た。

「兄ちゃん！」

アレンがフォルグを睨むと、フォルグは両手をぶらぶらとさせながら、

「そんな怖い顔で睨むなよ……アレンちゃん」

と、椅子から立ち上がったフォルグは、アレンの傍まで向かうとアレンの肩に右腕を回して左手でアレンの頭を乱暴に撫でた。

「兄ちゃん？」

何だか雰囲気が変わったアレンにエドガーは困惑した。

「あつ！ いや……これは、その……」

先程までフォルグの事をそう呼んでいた為、エドガーの前でうつかり兄ちゃんと呼んでしまった事を、アレンは激しく後悔した。恥

ずかしさで顔が真っ赤になる。

「もういいじゃねえかアレン！ それとも何か？ 俺が兄だと恥ずかしいのか？ え？」

と、アレンの頭を撫でていた左手を握り拳にしたフォルグは、今度はアレンの頭をぐりぐりと握り拳で挟る様に押し付けてきた。

「痛いって！ 分かったって！ 兄ちゃん」

アレンが、降参する様にフォルグにそう言うと、フォルグはアレンからようやく離れて歯を剥き出して大声で笑いながらアレンの肩をバシッと叩いた。

「アレン…… ちょっと可愛いかも……」

と、必死に笑いを堪えながらエドガーがそう言うと、アレンは再び顔を真っ赤にして困った様にエドガーを見た。そこには普段の大人っぽい印象は感じられず、十五歳の少年としての本来のアレンが顔を出していた。

「風呂に行つて来る……」

この場に居ずらくなったアレンは、そう言いながら立ち上がるとそそくさと浴室に向かつて行った。それを見たフォルグは、今度はエドガーに視線を向けると、悪戯っぽい笑みを浮かべて見せた。

「あいつもさあ……。ちつちえ頃は素直で可愛げがあったんだけどなあ……」

「今でも充分素直で可愛げがあるじゃないですか」

「がはははっ！ そりゃ傑作だ……。あいつが聞いたら顔を真っ赤にして怒りそうだ」

腹を抱えて笑うフォルグを見て、エドガーもつられて笑った。

「じゃあ、俺はちょっと調べものがあるんでな、ちょいと出かけてくる。アレンが風呂からあがったらそう伝えといってくれないか？」

「分かりました。伝えておきます」

「じゃあな……」

「気を付けて……」

エドガーがそう言つて礼をすると、フォルグは口元を少しだけ緩

めて静かに肯いた。

「それでフォルグは帰ったのか……」

風呂からあがって、寝間着姿のアレンが、そうエドガーに言うとエドガー軽く肯いた。ちなみにアレンの寝間着はエドガーの着ている寝間着の色違いのもので赤一色だ。

「そろそろ寝るか？ それとももう少し起きてるか？」

アレンが冷蔵庫から五〇〇ミリリットルのミネラルウォーターの入ったペットボトルを二本取り出しながら、エドガーに訊ねた。

「もう少し、アレンと話しがしたいかな……」

「俺と？」

怪訝そうに聞き返したアレンは、先程冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターの一本を、エドガーに渡した。

「うん。アレンの事もっと知りたいんだ」

「そうか……。なら、そのソファアに座ろうか」

と、アレンが赤いソファアを指差すとアレンとエドガーは、ソファアに腰掛けた。

「で、何を話そうか？」

と、アレンがペットボトルの蓋を開けて中のミネラルウォーターで喉を潤した。

「ハンターの事とかもっと詳しく知りたいな……」

「ハンターの事が……」

エドガーの言葉に、何か考え込むようにアレンは天井を見上げた。
「ハンターになりたいのか？」

「いや、そういう訳じゃないけどさ。ただ、ちょっと普段どんな事してるのかなって……」

「そういう事なら俺だってエドガーが普段学校でどんな事してるの
か気になるけどな」

と、アレンはエドガーの方を向いた。

「そう?」

「フォルグに学校は行つとけとはよく言われたもんだが、結局行かずにハンターになったからな」

「フォルグはさ、ハンターになるの反対しなかったの?」

「したさ……。でも、最終的には認めてくれたけどな」

「そつか……。でも僕と同じ年なのに自分で働いてちゃんと生活してるなんて凄いよ」

「今でこそなんとか食っていけるが、ハンターに成り立て頃はよくフォルグやダングスのおっさんに助けてもらってたっけな……」

懐かしそうに語るアレンを見て、エドガーは思わず笑みがこぼれた。

「何だ? 俺、何か可笑しい事言ったか?」

「うっん、何でもないよ……。それにしても、アレンって凄いよね。何か大人って感じがする」

「そんな事ないさ……。いろんな人に助けられているから生きていける……。まだまだ一人じゃ何にも出来ない唯の子供さ」

「でも、僕と比べたら大人だよ……。今だって何にも出来なくて、アレンやフォルグに頼りっぱなしだし……」

エドガーは溜息をつきながら、両手に持ったペットボトルに目をやった。

「それでいいんじゃないか? 今はどんどん周りの大人を頼ればいい。そしていつか自分が大人になったら、今度は頼られる存在になれるばい」

「そつか……。うん、そうだね。ありがとうアレン、僕もいつか頼られる大人になる為に頑張ってみるよ」

と、エドガーはペットボトルの蓋を開けて、中のミネラルウォーターを一気に飲み干した。

「その意気さ」

アレンはエドガーにそう言うと、ペットボトルの中の残りを全部飲み干した。

「へへへ……」

エドガーは両耳をペタツと後ろに倒して照れ臭そうに笑った。

「そろそろ寝るか？ ベッドは使ってくれても構わないぞ」

と、アレンが言つとエドガーは申し訳なさそうに首を横に振つた。
「うっん。アレンのベッドなんだからアレンが使つてよ……。僕なら平気だから」

「いや、俺はソファで寝るから大丈夫だ」

「でも、泊めてもらつてるのにそれじゃ……」

「エドガーは客なんだ。遠慮するな」

「なら、一緒に寝る？ ちょっと窮屈そうだけど二人でも寝れそうだし……」

と、エドガーがベッドを指差した。

「……」

それを聞いたアレンは無言になった。その様子にエドガーは慌てて、

「ご、ごめん！ 変な事言つたよね」

と、アレンに言つと、

「寝てる最中に蹴飛ばしたりするかも知れないぞ？」

と、アレンが真顔でエドガーに言った。それを聞いたエドガーは、
「あ、別に大丈夫だよ……」

と、半ば呆れ顔でアレンにそう告げると、その返答にアレンは納得した様に肯き、エドガーから空のペットボトルを受け取って、自分のペットボトルと一緒にゴミ箱に捨てに行った。

「それじゃ、寝るか……」

アレンが部屋の電気を消すと、二人は一つしかないベッドに入り、お互い背中合わせになって眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2539i/>

神の庭

2010年12月10日02時38分発行